

大橋：次は堀本武功京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科特任教授から「現代インド洋を考える」と題してご報告をいただきます。堀本先生は現代南アジア国際政治、アメリカのアジア政策がご専門でいらっしゃいます。ご著書に『インド-グローバル化する巨象』『インド現代政治史』、ご共著に『現代南アジアの政治』などをお持ちでいらっしゃいます。それではどうぞよろしくお願い致します。

堀本：堀本です、よろしくお願い致します。きょうお話する内容はインド洋のイメージ、インド洋の簡単な歴史、インド洋をめぐる各国の政策、インド洋の地政学、最後は今後のプロジェクトのテーマである海域学についてどう考えるか、簡単に説明します。インド洋について、日本、それからアメリカ、インドなどがどのようなアプローチをしていくか。それから、インド洋と太平洋との結び付き。それで最後に海域学との関連。このようなところをずっと見て行くというのが基本的な狙いです。お断りしておきますが、私はインド洋が専門ではありません。今回のこの報告のご依頼をいただきましたので、いい機会だからやってみようと思いましたが。インド洋については、はっきり言うと素人です。インド外交とか南アジアの国際政治をやってきたので、お聞きになると多分いろいろとボロが出るかもしれませんが、ご容赦をいただこうと思います。

1. インド洋のイメージ

図1が、インド洋のイメージということになります。この辺をきょうのお話の中心的なテーマにしておこうと思います。

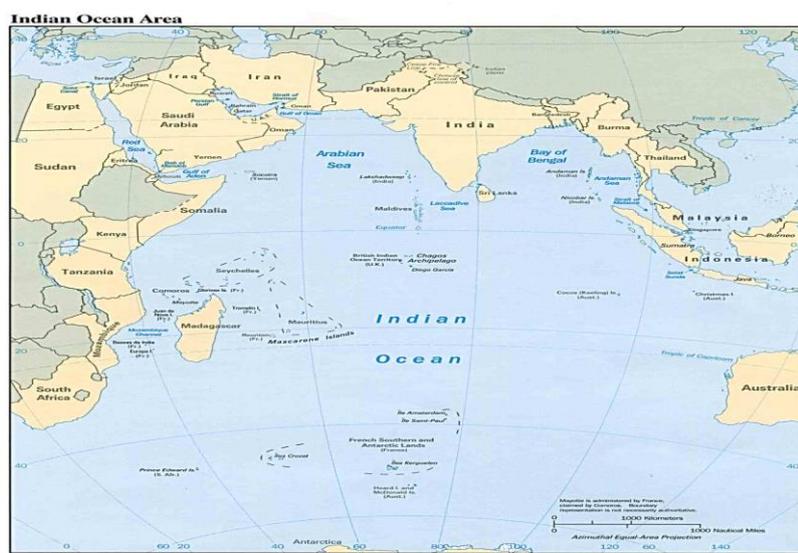


図1 インド洋と周辺国

出所：笠井亮平「第II章 3-(3)インド洋をめぐる動き」

（西原正・堀本武功編『軍事大国化するインド』亜紀書房、2010）

さらにもう少し拡大してインド洋プラス太平洋辺り、特に日本とインド、それからアメリカについても、どういうふうなことを考えているかということについてお話ししていこうと思います。

II. 略史

1. 歴史上の出来事

資料1をご覧ください。前半部分はお二人の先生にお話しいただいたので飛ばします。英国支配のあたりから、言ってみれば近現代が始まる。特に1757年のインドでのプラッシーの戦い。これでイギリスがフランスに勝って、インド洋における覇権を確立する。それから1869年のスエズ運河の開通。余談ですが、明治維新が1868年ですから、その翌年にはもうスエズ運河が開通しています。また、1869年はアメリカで大陸横断鉄道が開通する年でもあります。

このように、欧米でも新しい時代が動こうとしている。そのとき、かたや日本はまだ明治に入っただばかりということなので、いかに日本が急速な発展を遂げていったかということが分かります。逆に言うと、これから申し上げるアジアもそういった時代になりつつあるのかなという印象があります。特に話のポイントになるのは、大国とシー・パワー。要するに海の帝国、海の力を持っている国々をどういうふうに考えていくのかということを中心にしていきたいと思えます。

資料1 歴史上の出来事

- 歴史的な「海の道」
鄭和の大航海、宗教伝播（イスラームなど）、交易
- ポルトガルの進出
天正遣欧使節、ザビエル
- オマーンの覇権
- 英国支配
 - ◇ プラッシーの戦い（1757）、スエズ運河（1869）
 - ◇ 英領インドとインド洋沿岸の支配（喜望峯、スエズ、スリランカ、マラッカ海峡）

2. 第2次世界大戦後—米優勢から印中台頭

続いて近代、現代に移っていきます（**資料2**）。第2次大戦後のインド洋について考えると、アメリカの隆盛、インドや中国が台頭しているということが1つのポイントです。それから、もう1つは、イギリスがアメリカにディエゴガルシア島を貸した。それまでイギリスが保有していた島をアメリカに貸与します。そこから、アメリカがこのインド洋に進出をしていくという状況が始まります。

資料2 第2次大戦後の歴史

- 英、米にディエゴガルシアの50年間貸与協定（1966）
- 英国、スエズ以東撤退（1967）
- 海上交通路（SLOC）・・・90年代～／スマトラ沖地震（2004）／ソマリア沖・アデン湾の海賊横行（2005年頃～）、テロ、麻薬等の密貿易

その次にイギリスが67年にスエズ以東から撤退することになり、このイギリスとアメリカとの関係が逆転します。その後90年代辺りから Sea lines of Communication あるいは Sea lanes of Communication。要するに海上交通路の問題が90年代から出てきます。それに付随

して地震の問題、あるいは海賊の問題、テロの問題、麻薬密売等の問題が発生し、インド洋というのは第2次大戦後イギリスが支配した状況から、徐々にアメリカが影響力を及ぼす地域、海域に変わりつつある。つまり1970年代以降は米国が太平洋とインド洋で隆盛を確立する時代になるのだらうと思います。ですから、アメリカは第2次大戦後太平洋で覇権を確立し、ついで70年以降、英国に代わってインド洋でも隆盛を確立したことになります。

ところが2000年代以降、特に2000年代(2000-09年)を考えると、アメリカの支配に揺るぎが起きている。中国の台頭で太平洋、特に西大西洋で崩れつつあるということです。最近日本の新聞、あるいは外国の新聞でもアメリカと中国が太平洋をめぐる争っているという記事が良く出ますが、ポイントは太平洋全部ではなくて、あくまでも西太平洋です。ハワイから向こう、アメリカ寄りの太平洋が争いの対象になっているわけではありません。あくまで東シナ海、南シナ海、その近辺を中心にしてアメリカと中国で対抗関係が生まれているということになります。

Ⅲ. インド洋を巡る各国の動き：米中印豪日

1. 全体構造

ここでは各国の思惑を、とても大胆に誤解を恐れずに取りまとめてみました。どういうことかと言うと、アジアの新しい国際構造を見ていくときに、多分、基本はアメリカ対中国だらうと、これをある種のパワー・トランジション(power transition)とすれば、ステイタス・クオ(Status Quo)対現状修正の対立ということになるのだらうと思います。このpower transitionというのは、いろんな考え方がありますが、これについては深く検討しません。

さらにこれをもう少し詳しく見ると、最近、アメリカがアジアへのリバランスと言っていますが、これは後でまた出てきます。これに対して中国は大国の新しい大国関係の新しいモデルということを使うようになってきました。ということで、ある意味ではそのStatus Quoと現状修正の対立というところで具体的なレベルでは、アメリカはアジアにもう少し力をシフトさせている。それに対して、中国は新しい米中間で新型2大国間関係を作ろうということです。特にアジアの地域を見ると対立している。これが具体的に現れているということになるのだらうと思うのですが、2013年11月20日に国家安全保障補佐官のスーザン・ライスがジョージタウン大学の中で中国に対して“seek to operationalizing the model”と発言しています。

要するに、今までアメリカは新しい2国間関係を認めてきませんでした。ところが初めてアメリカが最近のオバマ政権で初めて、この新しい2国間関係を考えるseek toするという訳です。もっと具体的に言うと、中国の構想を考えて見よう、それをoperationalizingさせようじゃないかと。とは言え、できるのなら、やってみてよという強気な対応にも感じますが。

それからもう1つがインド太平洋あるいはインド洋太平洋。アメリカがアジア・リバランスの中で言い始めた言葉です。現在この言葉は未確定、未成熟なのですが、要するに米国主導によるアジア太平洋からインド太平洋、それからインド洋と太平洋を一体化させよう。インド洋の新しい位置づけを考えていこうということで、要するに太平洋からインド洋にいたる一体を1つのユニットとして、1つの海域として見るということを考えようというのが、多分新しいアメリカの対応だと。おそらくこれについては、日本もオーストラリアもそういった対応や認識については同じようなところがあるように見えます。

一方、中国はこのアジア・リバランスというのを中国包囲網と見て、これに反発・対応して

いる。どういうことかと言うと、アメリカが最初に言い出したのは **Pivot to Asia**、あるいは **Asian pivot** でした。ところがアメリカは最近、**Asia Rebalance** を使っています。理由は簡単でこの **Pivot to Asia** がアメリカによる中国包囲網ということになると、中国の反発があるので使うのを止めてきたという経緯があります。

それから、アジア諸国はどうなっているかと言うと、結果的に米中以外の国々にとって、経済では対中緊密化政策と安全保障では米国依存型対中国政策という 2 政策の適用が厳しくなっている。つまり、政治と経済がねじれている。特に東アジアでは言ってみれば二元的な体制が今のアジア、東アジアでは誕生しているということがあります。

それで、もう 1 つ、これが先程言った西太平洋がポイントであることとも関連しますが、**TPP** です。**Trans Pacific Partnership Agreement**、環太平洋経済連携協定の問題も絡んできます。だから、一方では安全保障とか国際構造の問題がありますが、同時にもう 1 つは、経済もその後ろに絡んでいるということがあります。少し具体的に各国の動きを見ていこうと思います。

表 1 が現在の軍事費の状況です。防衛費総額では、アジアが 2012 年に欧米に追いついたとも言われています。確か GDP についても、もうすでにアジアが欧米を追い抜いた。出していませんが、少なくとも GDP に続いて防衛費についても、アジアが欧州を超えたという状況があります。

	米国	中国	日本	インド
2011GDP兆ドル	15.9	7.3	5.88	1.85 (10位)
2010-11防衛費億ドル (アジア比率)	7,393	897.6 (30.54%)	584.2 (19.87%)	318.8 (10.85%)

表 1 米中日印の GDP と防衛費〔世銀 (2012) とミリバラ (2012)〕

2. 米国

アメリカは、インド太平洋という用語を使うことによって、インドの関与を期待するということがあるだろうと思います。基本認識は“インド洋は世界の通商、国際的なエネルギー安全保障、それから地域的安定に決定的な海上交通路を提供する”という考え方を出します。特にクリントン国務長官が、2010年7月の **Asia Regional Forum** で南シナ海の航行自由、アジアの **maritime commons** への接近開放性と国際法尊重を強調しています。アジア太平洋については、クリントン国務長官が公的にアジア太平洋という言葉を使い始めます。これはハワイでの演説です。続いてパネッタ国防長官が有名になった 2020 年までに大西洋から太平洋に海軍力の 6 割を 2020 年までに集中するということを言います。

もう 1 つは、アメリカがやっているのはディエゴガルシア島の拡充、インド太平洋の国々と合同演習をする。西大西洋で日本、インド太平洋構想でインドの関与をそれぞれ期待するということを行います。例えば、一昨年、クリントン国務長官がインドに行った際にこういう言葉を言います。“**We encourage India not just to look East**” つまり、インドは 90 年代初めから **ルック・イースト** 政策を進めていますが、“**Look East**” だけじゃなくて“**engage East and act East**” というふうに言って、もっと活発な関与を期待するということを行います。

それから、この 5 番の **TPP** の問題です。良く調べていませんが、どうも最近のアメリカの動きを見ると、テロとの戦いからアジアにシフトしようとしているように見えます。アメリカの場合は、確かにブッシュ政権になってからテロとの戦いとかいうふうなことを言って、世界的なテロ対作戦が重要だということを経験するような印象を受けますが、アメリカは来年度にアフガンから撤退します。シリアももめていますけども、イラクからも撤退しました。も

う1つ、もっとも大事なことは9.11が起きてから、アメリカの場合、ホームランドセキュリティという機関を作りました。それから1回も大きなテロが起きていない。しかもオサマ・ビンラディンを殺害したということで、どうもアメリカの対外的な政策の力点がテロから海域、アジア太平洋に移行しているのではないかという印象があります。

特に2011年6月の出されたテロ国家戦略は、大規模テロ政策とは決別する。オサマが殺害されたのが同年5月で、その翌月です。ということを見ると、アメリカがかなり本気になってアジア、特に中国との政策関係をどういうふうに確立するかということに力点をえつつあるところがあるのではないかという印象があります。

3. 中国

中国は明らかにランド・パワーからシー・パワーに移行しようということで、エネルギー資源確保とその運搬、地域戦略で米日印との対抗関係が生まれる。後で申し上げますが、戦略的な方向としては、インド洋では真珠の首飾りをやる。太平洋では、第1列島線と第2列島線をやって、その次にインド洋に本格的に進出するというので、胡錦濤が海洋強国を宣言する。それから今年4月の国防白書も富国強軍を訴える。それから、海軍力を整備する。エネルギーなどの輸送資源、資源輸送を考える。クラ運河プロジェクト、これはマレー半島を横切る形で造る、計画されている運河プロジェクトです。

それから、もう1つ重要なことは、中国がアフリカに対する視点を持っている。そうすると輸送ルートはインド洋が大事になる。趙南起(中国人民解放軍軍事科学院長)は1993年に「中国はもはやインドのためだけのインド洋を受け入れられない」と発言しています。93年というのは、中国が原油などの石油製品で純輸入に変わったということなので、明らかにこのころから、中国がインド洋に対する戦略的な関心を強めているということが言えるだろうというふうに思います。

図2が中国のいわゆる太平洋における第1列島線、第2列島線を示したものです。これは1982年に劉華清という軍事国家委員会の副主席が提唱したことで、今では、この考え方は中国海軍の中では基本的な考えになっています。

まず2000年から10年の間に第1列島線内の制海権を確保する、いわゆる内水化をしようということがここで分かります。このADIZ、要するにこれは最近問題になっている防空識別圏です。もう明らかにこの第1列島線の中。それからこのところ

です。南シナ海の方でも、中国がいずれ防空識別圏もやるだろう。2010年から10年間で第2列島線。その次の2020年から40年に太平洋・インド洋の米海軍の独占的支配を阻止しよう。現実にこのような方向で進んでいるという状況があります。



図2 中国の第1、第2列島線

出所：DOD, Annual Report to Congress: Military Power of the People's Republic of China (2006)

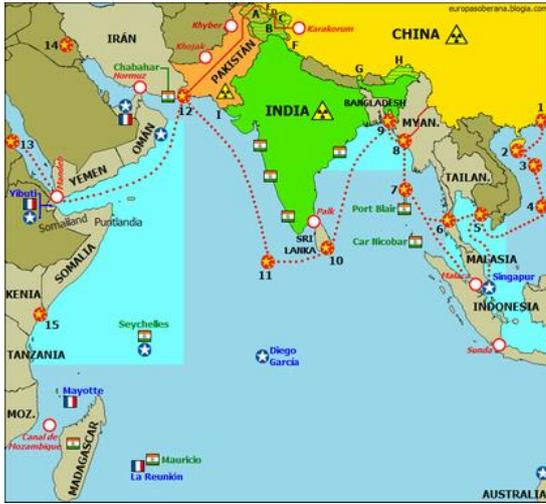


図3 真珠の首飾り

出所：EgarFabiano, *Español: Mapa geopolítico del "collar de perlas" chino*, 2012
http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Collardep_eraschino.png

飾りのように港を造って進めていこうという考え方があります。

今度はバングラデシュのチッタゴンです。真珠の首飾りの一環としてのチッタゴン港。2010年3月に訪中した ハシナ首相が中国に建設を要請した南東部コックス・バザール近くのソナディア深水港の方がチッタゴン港よりも好条件だが、中国内陸部へのアクセス難があります。

実は、チッタゴンまで港を見に行ったことがあります。その時市内交通がとても混んでいたもので、ドライバーに「海軍基地の中をとおれば早いだろう」と言ったら「分かった、やる」と言って。そうしたら、衛兵が「駄目」というわけです。僕が英語ででかい声で「通らせろ！」と言ったら「OK。その代わりなるべく早く抜けてくれ」と言うのです。そんなことありかと思いましたが、よく真珠の首飾りのときにチッタゴンが1つの拠点だというふうに言われていますが、私にはいささか疑問です。

図4が最近問題になっている中国海軍の空母・遼寧（写真略）と、来年の1月から編入される予定のインドのヴィクラマーディティヤ（Vikramaditya）という新しい空母。インドの場合はいずれ3隻態勢にする。中国も同じようなことを考えています。



図4 インド空母Vikramaditya

出所：インド海軍HP
<http://www.indiannavy.nic.in/news-events/about-ins-vikramaditya-newest-largest-ship-indian-navy>

4. インド

インドの場合は、インド洋について何を考えられるか。1つ目はインド洋≡インドの海という考え方がありますが、だれも認めていません。それからもう1つ、このインド洋というのは

それでいわゆる最近日本でよく言われるのが、接近阻止、領域拒否、要するにアメリカをこの中に入れないようにするという考え方が出てくる。2040年から50年にはこの地域ではアメリカと対等な軍になる。その次に中国で考えられているのはインド洋にどういふふうに進出するかということで、今も着々と手が打たれている状況だろうと思います。

図3がいわゆる「真珠の首飾り」と言われるものなのですが、海南島を出発点にして、南アジアでいうとバングラデシュのチッタゴン。それからスリランカのハンバントータ、パキスタンのグワーダルというふうに、真珠の首飾りのように港を造って進めていこうという考え方があります。

中国から守る、あるいは対中国カードに使うという考え方もあります。今のインドは中国にはかなわないけれどもいずれは勝ちたい、いずれ対等になりたい。要するに対等シンドロームです。最近出たインドの準公式文書と言われている *Nonalignment 2.0* の中で、国別の言及数を見ると、何と断トツに中国が多い 113 回。その次がパキスタンの 100 回。アメリカはどうかと思ったら、35~36 回、日本は 18 回というように、今の中国に対するインドの意識というのは、非常に強い。

具体的にどういうことか。要するにインドのインド洋認識というのは、インドの海ということがあります。1つの理由づけは英領インドの継承国家であるということ。当然そうすれば、インドは継承国家としてインド洋に対する優先権を持っていいのだということです。このインド洋重視論に関してパニカル (K. M. Panikkar) というインドの歴史家があります。彼は初代の中国大使ですが、*India and the Indian Ocean* という本を書いています。この中で彼が主張したのは、要するにインド洋を重視しなければいけない。そのためにはインドの海軍をもっと拡充する。まだ 1947 年の独立前です。そのころからすでにインド洋に対する意識が非常に強かった。しかもインドが独立したら海軍を重視しなきゃいけない、充実させるべきだということを使ったのです。

それから、インドのみがインド洋、ベンガル湾、アラビア海を睥睨しているということです。インドは、かつて日本軍が空爆の基地を置いたこともあるアンダマーン・ニコバル諸島に自分の領土を持っているために、インド洋に対する発言権がどうしても強くなるという傾向があります。今回調べてみて分かった意外なことなのですが、アンダマーン・ニコバルの北に、ココ諸島というのがあります。本当かどうか分からないのですが、ココ諸島は独立初期にインドのネルー初代首相が当時のビルマにプレゼントしたというふうに言われている。中国がココ諸島に基地を作っているとインドは盛んに非難しますが、ミャンマーの方では「そんなことはない。あれは気象基地だ」というふうなことを言っていて、このへんは分かりません。

それからもう 1 つは、中東権益への固執というのがあります。つまり、英領インドのころは、中近東というのはインドにとっては 1 つの市場。しかもインドのルピーが使われていた。そうこともあって、現在でも約 600 万人のインド人の出稼ぎがおり、年間送金は約 300 億ドルと言われています。さらにもう 1 つはイランのオイルをどういうふうに確保するかという問題がある。ということでインドにとってインド洋は自分たちの海だという意識がとても強いということがあります。

もう一方、アジア太平洋については、インドにとって両面性があります。どういうことかと言うと、インドのインド洋における優越性というものが「インド太平洋」という言葉を使うことによって、薄まってしまうので、対米追従は避けたい。その一方で、先程言った通り、中国は「真珠の首飾り」でバングラデシュ、それからスリランカ、パキスタンにそれぞれに拠点を設けており、それに対抗する必要もある。そのためにはインド太平洋という考え方に乗っかきたいという意識もあります。中国への具体的な対抗措置として、グワーダル (パキスタン) の隣にイランのチャーバハールという自由貿易港がありますが、このチャーバハール港に対してインドは建設支援をしています。中国とパキスタンは、常々、われわれのグワーダル港を見張るために置いているのだらうと言っています。

それから、このインド太平洋のインドにとってのメリットですが、90 年代初めにインド外交が掲げたルック・イーストです。その観点からは魅力的です。しかも、インド貿易の 55 パー

セントが南シナ海を経由するというふうなことも言われているので、インドとしてはアジア太平洋、インド太平洋という言葉は、ある意味では魅力的なところがあるということです。

具体的な措置としては、どういうことかと言うと海軍力を増強する。それから Blue Navy Water、外洋艦隊です。空母を手に入れる。それから新明和工業が作っている飛行艇です、これを入手する。潜水艦を増やす。戦闘機をフランスから買う。それから先程のアンダマーン・ニコバールに統一コマンドを作る。続々とやっています。

最近の例ですが、去年の 12 月に中国外務省が南シナ海の紛争海域において、石油とガス開発に反対しました。つまり、これは何かと言うと、インドがベトナムから許可を受けて、ベトナム中部の沖合で今 3 鉱区の 3 つの鉱区の石油資源開発をやっていることに反対したわけです。これに対し、インドのジョッシン海軍参謀長が「南シナ海の自国の権益を守る用意がある」といいます。これはインド海軍から見たときにかなり画期的です。インドというのはインド洋、ベンガル湾、あの辺り一帯から外に出ないというのが基本的な海軍の考え方ですが、それがもし南シナ海まで出て行くとなると、ある意味では従来の自分たちの作戦行動を変えることになるからです。

それから米日との関係です。シン首相が今年の 5 月に行ったときに、インド太平洋海域の海の安全を改善することについても言及しています。

その他にも、インドは本当にいろいろなことをやっています。インド洋の多国間協力です。BIMSTEC(ベンガル湾他分野技術・協力イニシアティブ)や IONS(インド洋海軍シンポジウム)を作っている。インド、モルディブ、スリランカの安全保障グループも作っており、2013 年 12 月の第 3 回会議でモーリシャスもセーシェルも加盟することになった。このように、かなり多国間枠組み、ネットワーク型の安全保障に対する枠組みを作ろうとしています。

資料 3 インド洋の多国間連携協力

97 年：IOR-ARC(環インド洋地域協力連合)

インド洋沿岸国 20 箇国で構成 (S .Asia では、インドとスリランカが加盟)

→貿易・投資の活性化

97 年：BIMSTEC(ベンガル湾多分野技術・経済協力イニシアティブ)

→貿易・投資、運輸通信等 6 分野の域内協力

08 年：IONS(インド洋海軍シンポジウム)。35 カ国。

→インド洋海上安全保障の海軍間対話フォーラム

5. 豪州

基本的には太平洋国家ということですが、最近では太平洋国家であると同時にインド洋国家の認識も持っている。有名な政府のアジア白書『アジアの世紀における豪州』(2012 年)でも強調しているということとか、あるいは今年では防衛白書を見てもインド洋のインド太平洋の重要性を期待しているということがあります。

6. 日本

日本の場合は、アメリカの政策に基本的に対応しているということがありました。これに輪をかけたように、安倍首相の考え方です。特に 2007 年に訪印したときのインド国会での演説（資料 4）。この演説はインドで本当に人気が高いです。「うまいこと言ってくれた。とても安倍さんは素晴らしい」と。

資料 4 インド国会演説「二つの海の交わり」 (Confluence of the Two Seas)

「2つの海の交わり、インド洋と太平洋という
2つの海の交わり、新しい拡大アジアが形をな
しつつある今、この領域に対する両端の認識は
国民各層のあらゆるレベルで友情を深め・・・」。
(2007年8月22日)

資料 5 ハドソン研究所演説予定稿

「インド・太平洋の世紀を、日本と米国
は一緒になって、引っ張っていくべき…
もし皆様が私を、右翼の軍国主義者とお
呼びになりたいのであれば、どうぞ」
(2013年9月25日)

[外務省 HP より]

それから、2013年9月25日のハドソン研究所で安部さんは演説を予定していたのですが、その予定稿のなかで最も大切なコモンズが資料 5 であげたものです。この他にも日本外交はオープンで自由な経済を求めなければいけないというようなことも言っています。ということで、安倍さんの考え方かなりインド、あるいはアメリカの考え方に海をめぐっては近くなっているということがあります。図 5 が自衛隊初の海外基地となるジブチの拠点になります。

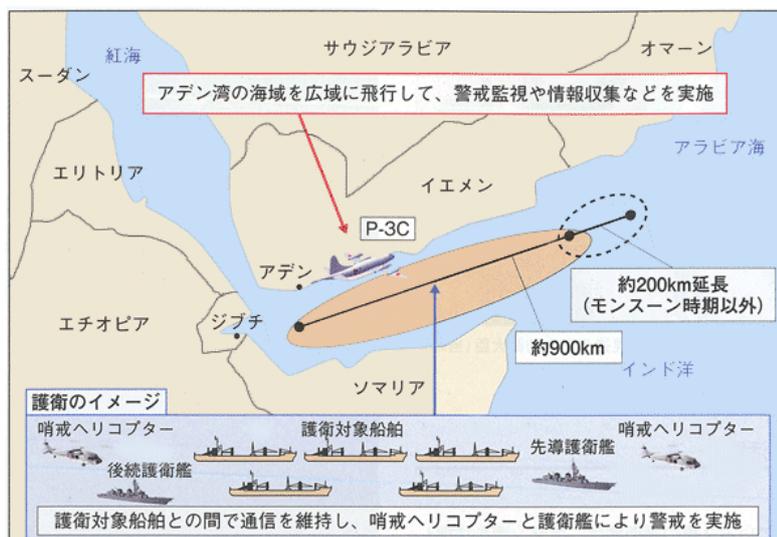


図5 ジブチ拠点 (2011年7月)

出所：防衛省 HP

(<http://www.mod.go.jp/js/Activity/Anti-piracy/anti-piracy.htm>)

7. 4カ国枠組み

最後に、こういった一連の流れを受けて何が起きているかということですが、米日印豪安全保障枠組、Quadrilateral Approach (4カ国アプローチ「クワッド」) という考え方があります。これは基本的に先ほど説明したアメリカのアジア・リバランスの原型だともいいだろうと思います。アジア・リバランスの原型です。

ということかと言うと、2005年ごろから開始された4カ国のより協力体制です。代表的な事例が2007年9月にベンガル湾で米日豪印シンガポールが行った大規模訓練である、マラバール合同海軍演習です。ここで、みそはシンガポールです。これについては、インド側に言わせると、米日豪印だけでやると中国を刺激すぎるということで、シンガポールを混ぜた。シンガポールを混ぜれば普通の大規模海軍の合同練習だからいいじゃないのということを入れたという説もありますが、真相のほどは分かりません。

この4カ国枠組みは安倍、ハワード、ブッシュの退陣と、中国の強烈な反発によって4カ国という枠組では死滅しています。しかし、印米防衛協定(2005年6月)、印豪防衛了解覚書(2006年3月)と安全保障協力宣言(2009年1月)、日印安全保障協力宣言(2008年10月)など、2国間のレベルでそれぞれが4カ国枠組みに近い形をとっています。

もう1つ、日米印の協議というのが2011年12月から始まっています。このとき、ついに日本も3カ国枠組みに乗ったのだと思います。2011年の4月に、インドの当時の外務次官だったニルパマ・ラーオという女性に来て、日本の外務省と打ち合わせをします。その時点では少なくとも外相レベルで3国が会うという話だったはずなのですが、それが外務次官レベルに落ち、最終的に実現したときは局長レベルに落ちたのです。これは中国の懸念を引き起こさないようにするためだと考えていいだろうと思います。2013年11月には東京で行われました。

IV. インド洋の地政学

1. 経済規模の拡大化と軍備増強

最後にもう2点。1つは、海の重要性です。経済規模の拡大化は軍事増強、特に海軍の拡充を伴います。歴史的に見れば、パックス・ローマナ(ローマによる平和)、パックス・ブリタニカ(英国による平和)、パックス・アメリカナ(米国による平和)でも海が重視されています。

2. マハンのインド洋重視論?

アメリカの場合、海軍史家、マハン(Alfred Thayer Mahan 1840-1914)のシー・パワー論による海軍力増強と言う主張がありました。彼は「インド洋を支配する者がアジアを支配する。インド洋は7つの海の鍵を握る。21世紀においては、世界の運命はインド洋において決せられるだろう」というふうに言われています。

マハンのインド洋重視論は、インドの海軍関係者、あるいは海軍経験者が良く引用する言葉です。元インド海軍のゴーシュ(Cdr. P.K. Ghosh)はインド洋について、シーレーンがインドにとって重要な意義を持つと。で、ロンドンのハルシュ・パントも同じで、論文の中でも必ずそのマハンの言葉を引用するということがあります。

しかし、イギリスのD・スコットはこのマハンのインド洋についての主張はうそであると言っている。マハンの主著である *Influence of Sea Power Upon History* やその他の著作を見ても見当たらず、これはインド人の海軍関係者が勝手にでっち上げたのだろうというのが彼の結論です。ただし、そのスコットが何を言っているかという、インドのマハンの唱えたシー・パワーとしての態勢を整備することは重要だということです。具体的には海軍力のパワー・プロジェクトです。シーレーンの管理、港湾へのアクセスを進めているということで、彼は、自分のインド海軍論とインド洋に関する論考の中で“India's Grand Strategy for the Indian Ocean: Mahanian Vision”というこというふうな言葉を使って、マハンの言っていることを現

実にインドは進めているということを言っています。

因みに、このマハンというのは日本でも深いなじみがあり、彼の弟子というのが、日露戦争で日本軍を勝利に導いた秋山真之です。彼はマハンから何を教わったかということ、要するに封鎖作戦です。もっと言うと、兵糧攻め。このマハンがキューバを攻めたときに、キューバの港を封鎖して兵糧攻めにし、大成功させです。だから秋山もこの考え方をとって旅順港を攻めるときも兵糧攻めにし、日露戦争に勝ったという経緯があります。

V. むすび

1. 今後のインド洋秩序

今インドで最も頻繁に発言している国際戦略論家である、ラジャモーハン (C. RAJA MOHAN) が書いた *SAMUDRA MANTHAN Sino-India Rivalry in the Indo-Pacific*, Carnegie, 2012) という本を紹介します。Samudra Manthan は乳海攪拌と訳される、ヒンドゥー教の天地創造神話のことです。この中で今後のインド洋秩序はこうあらねばならない、こうあるべきだと彼が言っているのは、次の3つの言葉です。協力的安全保障、大国協調、それから、力の均衡。これらをこの今後のインド洋の中では考えていく必要がある。あるいはこれらの実現を目指さなきゃいけないのだと彼が言っている。

これを逆に見ると、もしかしたら、インド人の戦略論者はある意味ではまだインドは力がない、だからインド洋がこういう状態にあることが望ましい、と言っていると見ることもできます。

2. 「海域学」との関連

いよいよ本当の結論になりますが、海域学との関係でどんなことが言えるのだろうかということです。インド太平洋との連携もそうですが、要するに海域が広域化している。トランスポレーションが非常に進んできたということもあるし、広域化・多様化も進んでいるということはどういうふうに考えるのかが1つあります。

また、地政学との関係で海域学ではどういうふうに考えていったらいいのか。地政学というと第2次世界大戦まで日本では学問としては非常に盛んでしたが、それから先は人気なくなりました。一方、先程のマハンもそうですが、アメリカでは依然として地政学に対する考え方、地政学的な発想をするというのは今でも続けられています。先程外邦図を見ながら思ったのですが、日本陸軍や日本軍があの外邦図を必死になって集めたというのは、ある意味では地政学との関係が強いということになります。海域学の中で、やはり地政学は1つの要素になりうる考えたということです。

最後にインド洋、太平洋についての考え方です。『アジア（特に南シナ海・インド洋）における安全保障秩序』（国際問題研究所、2013/3）では、地理・戦略・経済・秩序・政治外交の空間からインド太平洋をどう理解するかということを検討している。リアリズムだけではなく、多少ともリベラルなところも入っていて、読み方としては非常に面白い本になります。どうもありがとうございました。

大橋：どうもありがとうございました。